



鐵舟

Tesshu

vol. 75

2025 秋
(令和 7 年)

鉄舟禅会ホームページ



鉄舟 再復刊第七五号 目次

臨濟録提唱抄録 (五)	・ ・ ・	垣塚 玄了	2
的翁老大師再録 (二)	・ ・ ・	大森 曹玄	6
西洋の没落と日本の立場	・ ・ ・	岩立 実勇	12
第二維新運動の系譜 (三)	・ ・ ・	廣瀬 祐子	19
デザインと私	・ ・ ・	遠藤 真美	22
境目の考古学	・ ・ ・	齋藤 健	28
親子で坐禅会 高歩院	・ ・ ・	・ ・ ・	29
心落ち着くひと時に (週刊とうきよう)	・ ・ ・	・ ・ ・	26
小淀西町会 こども神輿巡行	・ ・ ・	・ ・ ・	28
お知らせ	・ ・ ・	・ ・ ・	29

趣旨

我々同人の誓願は、要するに正見の体現であり、その生活化である。正見とは無我の正覚に外ならない。これこそ、そしてこれのみが、人生の唯一の指導原理である。何人と雖もこれなくして人生を正しく生き得るものではない。

われわれは、この誓願ゆえに、久しく鉄舟会に拠つて互いに切磋琢磨してきた。

いまはこの誓願ゆえに、その正見を各自の専門の道を通じて表詮しようと思う。禪に、書に、画に、剣に、そして詩に、もとより正見それ自体は絶対的な道理の眼である。ではあるが、一面それは邪見と相対的な境位をも含むものである。その立場においては、われわれは邪見に対しては仮借なく折伏してゆこうと思ふ。

われわれのこのささやかな営みが、願いの彼岸に果たしてよく達しうるか否かは、ひとえに同憂の高士の賛助による外はない。希くは絶大の庇護を賜らんことを。

信条

- 一、われわれは、自己と世界についての正しい見方 (正見) と、正しい生き方 (正精進) 即ち無我の正覚に立つて万世のために泰平を開くべき自覚と責任とを明らかにしよう。
- 一、われわれは安易な妥協を排し、孤高真実の道を独往するともに、あくまでも師承を尚び、道交を厚くし、万物一体宇宙共生の真理を實踐しよう。
- 一、われわれは一切の悪に対しては仮借なく折伏するが、徒らに世事の非に激して焦燥に陥ることなく、一面風雅の道に逍遙するゆとりを養おう。
- 一、われわれは、自己を真実人体として現成すべく、日常つとめて打坐し、姿勢を正し、呼吸を正し、想念を正し、自己の周辺から漸次世界を正化しよう。

鉄舟禅会同人

臨濟録提唱抄録（五）

提唱 垣堺 玄了老師

抄録 齋藤 健

今時の学人の得ざることは蓋し名字を認めて解を為すためなり。

大策子上に死老漢の語を抄し三重五重に複子に裏んで人をして見せしめず、是れ玄旨なりと道つて以つて保重を為す。大いに錯れり。

瞎屢生。爾、枯骨上に向かつて什麼の汁をか覓む。

一般の好悪を識らざる有つて教中に向つて取つて意度商量して句義を成す。屎塊子を把つて口裡に向いて含み了つて別人に吐き過るが如し。

猶お俗人の傳口令を打するが如くに相似たり。一生虚しく過す。

也い我は出家なりと道つても他に佛法を問著せらるるや、便即ち口を杜じて詞無く眼は漆突に似て口は樞樞の如し。

此の如きの類は彌勒の出世に逢つとも他方世界に移置せられ、地獄に寄せて苦を受けん。

（意訳）

今修行している人が「わかった」ということにならないのは、文字を読んで理解して、分別解釈するからだ。

紙に、昔の有名な老師の語を書き写して三重五重に風呂敷に包んで人に見せないで隠している。それで「俺は奥秘を持つてるんだ」とほのめかして、権威付けしている。それは大いに誤りだと。

眼の開いていない大馬鹿者と言わざるを得ない。干からびた骨に一体どんな肉汁を求めようとするのか。

一般の在家の修行者も、良いも悪いもわからないで、お経でも本でも提唱でも、そこに向かつて自分の意志をはたらかせ推し量る。これは「尿の塊」を汚いか綺麗かもわからず口の中に入れて、それだけならいいけれどもそれを人に吐き散らしているようなものだ。

たわいもない事を口から口へ伝えるのと似て、結局一生を虚しく過ごしてしまう。

俺は出家したんだ、勉強してきたんだと言っている人も「仏法の的々の大意は何ですか」と問われると途端に口を閉じて黙つてしまい目をまん丸にして一言も発することができない。

そういう人は弥勒菩薩が出てきたとしても、別の世界に入れられ、結局地獄に堕ちてしまうことになる。

(提唱)

僧堂では修行が始まって三年間は文字に触れさせません。七年、八年目ぐらいでようやくと新聞などにも触れられるんです。要するに文字に関わるなということなんです。現代では文字に関わらずにやっていくのは無理です。

冒頭の「今時学人不得」は「こんじ今時の学人の得ざる」とはこういう理由だ」と読んだわけですが、「今時の学人は不得にして」と読んでみましょう。禅を学ぶ人が、わからないのに文字を解釈しようとしている、ということとです。

「自分がわかっていない」と自覚できることが大事なのですが、ほとんどの人は、それを隠そうとします。隠すために色々なことを更に上に積み上げる。だから自分の本心からどんどん離れていってしまう。これは修行する時に一番注意しなければいけないことの一つです。

鈴木大拙先生の全集に「臨済の思想」があります。こ

の中に沢庵禅師が写したと言われている五逆人聞雷もんらいが書かれています。臨済録に対する提唱のような内容で、抄物しょうものと言いますが、昔はこういうものも秘伝であつたようです。しかし、そんな書いてある「もの」に何があるでしょうか。見てどうするのでしょうか。何の実力もつかないわけです。

また、わかりもしないのに、わかったようにして、ペラペラしゃべるといふこともあります。会社でもそうです。ちよつと気の利いた新人であればそんな人はすぐに見破つてしまいます。そんな人に関わっていると一生を虚しく過すごごしますよと言っておられるわけです。

その類の人は「さて本当のところ、この仕事の本質は何ですか？」と問われたとたんに、何も言えない。そこで一言で答えられるならば、その人はそれなりに掴つかんでいるといえますが、本質を掴つかんでいない者は本物が現れるとすぐごと退散するしかないのです。

修行することにおいて、あるいは社会生活においてどう本質を捕まえているかということが問題になってくるわけです。禅の本質のつかみ方は本質のさらに根底です。そこに立つと土台がしっかりしてくる。だから、ダ

メなものは自分でダメだと判断もできるし、いけると思
ったものは、いけると、きちんと判断できるのです。そ
れでは、その根底となるものをどのように掴むのかとい
うことですが、それが「無字」の公案です。無門関の
慧開^{えいかい}禪師の評唱にあるとおりにやるしかないのです
が、老婆心ながら自分の経験からアドバイスをさせて頂
きます。

まず一つ目として、禅の一通りのことは頭に入れてお
いてください。お釈迦様の発見されたことを追体験する
のですから、自分に相性の合う本でいいと思います。そ
れを読んで禅の常識の単語、事実、そうだったものは頭
に入れておく。何にもないところからは何も出ません。
坐禅して頭が空っぽになると、何か突然飛び込んでく
る、なんてことは起きないのです。

次に、坐禅が大基本です。坐禅しないで禅の修行はあ
りません。よく動静一致といつて法定^{ほうじやう}、茶道、書道を
しますが、これらは坐禅の代わりにはなりません。これ
は強調しておきます。なぜか。坐禅というのは対象が全
くないんです。全く取り付くしませんが。ところが、こ
れらには具体的な対象があります。どこまでいっても対
象がある。

坐禅にはその対象がないのです。「無字を見てこ
い！」なんて言われても、ボヤーとした世界なわけ
です。そのボヤーとした世界のところを自分を中心させ
ていかなければならない。だから、それができるように
なれば、お茶や法定ができるのは当たり前なんです。逆
に茶道、法定や書道は何が良いのかというと、自分がど
ういう状態なのかはつきりわかるということです。特に
書道の場合は書いたものをぱっと見て比較すれば分か
る。それで一発でわかってしまうわけです。

それから、提唱はできるだけ聞いた方が良いでしょう。提
唱のシャワーをあびるということです。何でもそうです
が、そのものを理解しようとしたならば、そこに浸るこ
とが不可欠です。意味がわかるうがわかるまいが、その
中に身を置いていくのです。そのうち「わかる」ときが
来るのです。

もう一つ注意しておくことは、坐禅して悟ることに大
げさなことを期待してはダメです。竹林でカチンと音が
鳴って一発で悟ったとか、パツと花を見た瞬間に全部分
かったとか有名な話がありますね。自分にもそういうこ
とは起こるかもしれないけれども、そういうことが起こ
らないと本当のところは分からないんじゃないかと考え

て、自分を閉じ込めていってしまうことがあるのです。人によって契機は異なるのですから、画一的に考えるところのことから離れられなくなり坐禅の方向が全く異なってしまうのです。とにかく只管^{ひたす}ら坐ることです。

数学界には素数に関する「リーマン予想」というものがあります。百何十年間、いろいろな人が証明に取り組み様々な部分証明をして、あと一つギャップを乗り越えれば証明が完成するところまでできていますが、いまだに証明されていません。しかし、そのギャップは証明の始めのところにあります。ちょうど公案修行のほじめに「無字」の公案が置かれているのと同じです。

そして、最初のギャップを証明するためには現在の数学の公理体系ではおそらく無理で新しい公理を付け加えなければならぬだろうといえます。

それと同様に無字の公案を突破するためには、自分自身の「公理」つまり常識分別に新しいものを付け加えない限りはできません。

始めに無字を透過することで新しい公理を自分に付け加える。そのことによって今までとは違う観点、違う次元から世界を見られるようになるということです。

リーマン予想の証明と、禅で無字の公案にとりくむことで全く異なるのは、リーマン予想は証明できるかどうか分からないのに対して、無字の公案はお釈迦様の追体験であり、必ず自分にもできるということが保証されていることです。お釈迦様以来これまで二千五百年間のあいだに夥しい数の修行者が無字を突破してきたのです。だから皆さんも疑わないでやっていたいただきたいと思えます。

(二〇二五年九月六日)

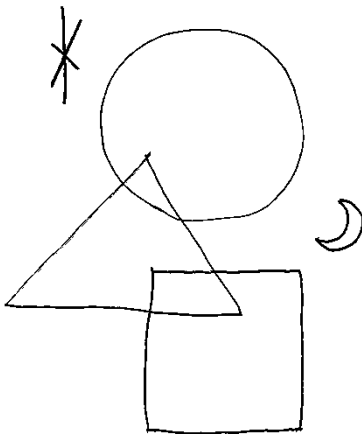


イラスト / 斎藤伊生史

的翁老大師 再録（二）



再録第二回は、「鉄舟会の基本理念」のサブタイトルの下に、東西冷戦下の昭和三十年に書かれた文章をお届けします。国際状況は違っても、ウクライナや中東の戦火が世界に拡大しかねない現代に修行する私たちにとつて、示唆に富む内容ではないかと思います。

西洋の没落と日本の立場

— 鉄舟会の基本理念 —

大森曹玄

（一）

原水爆の脅畏を伴う「二つの世界」の対立は、全世界を絶

望的な不安に陥れているが、これを本質的に考えればわれわれは本来その抗争には関係がないのである。なぜならばゲオルギウのいうように、それは近代的唯物主義の両肢の争いであるからであり、またトインビーの言葉を借りれば、西欧キリスト教文明に対する、共産主義の形を以てする東欧ギリシヤ正教文明の反撃だからである。もともと二つの世界は近代文明の内部の分裂に過ぎないのである。それが同じく近代文明の最高の作品たる原水爆で戦おうとするのだから、正しく、文明が文明を破壊するというか、結局ヨーロッパ近代文明の自壊作用あるいは近代的人間の自殺行為というより外に言いようはない。

歴史の転換には必ず戦火の洗礼を伴うのが過去の事実であるが、その意味から言へば、近代文明の自己否定の業火は第一次大戦以来燃えだしている。もし第三次大戦があるとなれば、それを結論づけるものと思はれる。その場合、本質的にはわれわれに関係のない「二つの世界」の抗争ではあるが、現実問題としてはわれわれも必ずその渦中に巻き込まれてしまうであらう。日本の利用価値と無力さとその上に現実的には「二つの世界」的要素をもっているからである。そうなたら、われわれはどうするか、日本の叡知と努力の一切は、ここに傾け尽されなければならぬ。もし

幸に戦争が回避できたとしても、近代文明の崩壊は免れないであろう。その理由の一つは人間の喪失であり、その二は原子力の産業利用であり、そして第二はアジア民族の興起である。

ゲオルギウによれば、近代人とは既に純粹の人間ではなく、人間と機械との雜種として生れた『市民』という動物の新種だという。バーナード・ショウも、かつて近代人は一番二番と呼ぶのが適當で、一人二人と呼べるような代物ではない、と言っている。自我主義的な自覺に出発した近代が、その發展の極においてその特徴とする人間を喪失し、分裂させ、機械化してしまったのである。出直す外はない。

原子力の産業利用は必然的に第二次産業革命を将来し、その結果は資本主義も共產主義も不可能ならしめ、それらを超えた全く新たな原子力時代というにふさわしい思想、制度を生むものと考えられる。またアジアはこれまで世界の辺地として取扱われ、一度も檣舞台に登場したことはなかったが、第二次大戰の結果として西欧の侵略から解放され、大部分が独立国としての立場を確保することになった。このことは科学技術と經濟の發達によつて、全世界が一つの方向に進みつつある現状を、別の側

面から一層拍車をかけるものであると同時に、到底これまでのようにアジアを植民地とする西洋中心的世界構造をいつまでも保持することを許さないであらう。アジアの擡頭は必ず世界文明の様相を変化させるに違いない。これらの理由から、大戰の有無に拘らず、西洋近代文明は没落し、世界の歴史は轉換すると確信するものである。しからはその後に来るものは如何なるものであらうか。

一概に西洋文化、近代文明と言つてみても、その内容は実に複雑多岐であつてむしろ一義的に表現することの方が不自然である。だがその中心的傾向について、大体の性格づけをすることはできないこともない。その意味で極く大まかに見ると、誰しも先づそこでは自然の支配と征服とにその主力を注いだ点が目につくであらう。近代的と言はれる科学文明も、結局は自我が自然を征服しようとする要求によつて生れたものである。かつてベーコンは「知識は力なり」と言つたが、それは人間の自我が自然を征服して、その主人公た然とする力を誇示したに外ならない。従つてその文明の性格は自我主義にあるといつてさしつかえない。

禪語に「蝦蟇つて斗を出でず」とあるが、近代文明は所詮は「我思う、故に我在り」の次元を多く出でるものではない。そのような自我の自覚の仕方によつて自由にして平等なる自律的個人のアトムの構成された社会がいわゆる個人主義、自由主義と呼ぶ近代ヨーロッパ的秩序である。そしてそのような個人が経済力を掌握することによつて無限の自由を追求し、そこに自我を実現しようとしたのが資本主義である。

しかるに、資本という経済力を握った個人が一方的に自我の自由を主張するとき、他の多くの人々の自由を圧迫し従つて平等を破壊する。そこで「万国のプロレタリア団結せよ」というスローガンによつて、平等を破壊されたことを憤る人々が階級的に結束を図ることになる。階級こそは最も具体的で一番根源的な歴史の担い手だとする階級的主体が強調され、国境を超へ民族を越えて横断的に組織づけられてゆく。

ところが第一次大戦後の世界状況は、社会矛盾の根本原因が「持てる国」と「持たざる国」との国際的不平等にあると思はせるようになり、それを打破しない限り国内的な経済不安も根本的には解決し得ない。そのためには国内は鉄の結束をもたなければならぬとする民族的

全体主義を生むに至った。

一切が神中心的に考えられた中世思想に疑問をもった近代初頭の人々が「人間とは何であるか」を問うたとき、その回答として発見した自我が、その後の一世紀の間にいま述べたように三つの姿に分裂したのである。

それは「我思う」という意識の次元で、「力なり」と誇負する「知識」によつて、主知的に自我が把まれたことからくる当然の結果である。知識の本質は判断であり、分別であり、分割である。そこでは自我も空気を吸い、食物を摂る具体的な人間としてではなく、対象的に考えられた抽象人になってしまう。個人や階級や民族に分けられ、その一面が抽出されて、それだけが絶対なるかのように考えられるのはそのためである。そこに個人的エゴイズム、階級的エゴイズム、民族的エゴイズムが形成され、三者が力づくでエゴを闘はす必然的な運命が横たわっている。

歴史上の事実として見れば、そのうちの民族的自我は第二次大戦で先づ敗退し、いまや個人的自我と階級的自我とが「二つの世界」を構成して、歴史の場において雌雄を決せんとしているわけである。この二つに分割された近代的自我の両半面は、後者においては蟻の如く奴隸

の如く機械の如く「沈黙の自由」もない刑務所的世界に人間性を喪失し、前者においては狼の如く餓鬼の如く飽くなき享樂の世界に人間性を喪失している。二つの世界に相分れ相対立して争いながら、自我主張の極において自己を喪い、その足元にぼつかりと無しの虚無の深淵が口を開いている点においては一致している。

近代文明によって構造された二つの世界は、かくて一面に戦争の危機にさらされながら、一面に救いのない虚無的絶望に喘いでいるのである。

(二)

近代的自我の直面するこの危機はどうすれば脱出できるだらうか。否応なしに「我思う」の次元における自我を否定的に超出する外はないであらう。そしてより根源的な、本来の自己に覚醒しなければ他に生きる途はない。「我思う」の意識の次元を否定的に超えるとは、禅の言葉でいえば、「八織田中に一刀を下し」て本来の面目に契当することである。仮りにこのような立場を東洋的というならば、「二つの世界」に分裂して力争する近代的自我は、この東洋的立場に覚証しなければ絶対に救いはないと言はなければならない。われわれはここに東洋文

明の歴史的必然を洞察するものである。

東洋文明と言っても、西洋のそれに劣らず複雑を極めている。けれども西洋的な立場を、自我による自然の征服という点に特徴的な性格を認め、これを自我主義と呼んだのと同じような角度からいうならば、自我が自然に随順し、自然と自我とを一如に包むその根底に向つて、根源的自己を主体的に把む無我主義が東洋の根本性格だと言つてさしつかえないだらう。

八万四千というぼう大な仏教の教えも結局はこの無我到に帰するであらうし、儒教を中心とする諸子百家も窮極は偏無く党無き大同世界の實現であらうし、また神の道に随つて自ら神道ありとするわが随神道も、つまりは自己の根源たる絶対者に随順する無我の道と言つてよいであらう。まことに無我の道こそは岡倉天心のいわゆる「全アジア民族共通の相続財産」でなければならぬ。

「我思う」という人間的な自我意識の底を突き破つてのみ初めて対面できるところの自己ならざる自己——自己がそこから出で、そこに帰るような根源的絶対主体は、宗教的にはこれを神といい、仏といい、または本来の面目ともいう。それは客体的な「有」ではなく、どこまでも主体的な「無」である。その主体的な無が、われわれ

の自己において生きるという自覚が「無我」というものであらう。

無我は一般に誤解されているような抽象的觀念ではない。むしろ最も具体的ないのちの実相である。いのちは「生まれて生む」ことによつて、受動から能動へと立場を転換しながら無限に相続するもので、その最小単位は親子として見られるものである。子は生まれた個別生命として、生むいのちである親という全体生命に内在し、親は生むものとして、生まれるいのちたる子に超越する。しかも親と子とは同一生命の連続延長として平等一体であるが、他面同じように全体的生命を含む独立の主体として絶対の差別である。連続して連続せず、差別にして平等というのがいのちの構造である。しかし親は子を生むと言つても、生む力を本来的にそれ自身にもっているのではなく、根源的な生みの働きに基礎づけられて初めて生むことができるのである。われわれは生む働きの根源をつきつめていくとき、その極限において、生む働きを基礎づけている絶対者に直面するであらう。時間と空間の枠内で限られたいのちを生きるわれわれは、その限界において自己を基礎づけているこのような超越的な主体にふれ、それこそ、自己の深い底にある無限のいのち、

本来の面目だとの自覚を得るのである。無我の立場はこのような具体的ないのちの覚証でなければならない。

われわれが祖先以来、いわゆる全アジア民族共通の相続財産たるインド、シンの文化を吸収しつつ展開してきたいのちの実現態は、実に右のような構造において「我と汝」の關係を内に成立させたのであつた。我なる主体と汝なる主体とを超え包む生命共同的全体性は、具体的には血と土の合一としてわれわれに対しては汝としてのぞむ客体でありながら、同時にわれわれがそこに生まれそこに働きそこに死すべく生命を託している絶対主体である。主体であるからそれは自己である。自己でありながら客観性をもつてわれわれに呼びかけるこの生命共同的全体性こそ、古来「国体」と呼んできたところのものである。アジア共同の遺産の精粹は、ここに全き姿で含蓄されている。

もし近代的西洋文明を自我的と規定したように、かりにこれを東洋的無我文明と呼ぶならば、この原理の基盤に立つとき相抗争し分裂した自我の三態は、深く無的主体に基礎づけられ各々その所を得て一如的に生かされるであらう。即ち、個人は民族的全体の超越性を正當に認め、民族的全体はまた内在する個人の独自性を容認する。

階級もこれを超えた民族的全体を認めその内部における機能的存在であることを自覚するとともに、階級内における個人の独立自由を認めるであらう。そして西洋的虚無もこの創造的な、妙有的東洋的無にまで徹底することにより、東西の文明は無の深淵において相会し、真に一つの世界の原理を現成するのではないだらうか。

政治も経済も、法律もこの原理によつて運用されるとき、対立抗争奪取の影をひそめ、大和円融推譲の仁愛の相を現するであらう。世にいわゆる原子力文明なるものは、このような原理に立つべきものと信ずる。日本はこの原理によつて自らを再建することによつて、万世のために太平を開かねばならぬ、われわれはここに日本民族の歴史的使命を自覚するものである。

(高歩院住職)

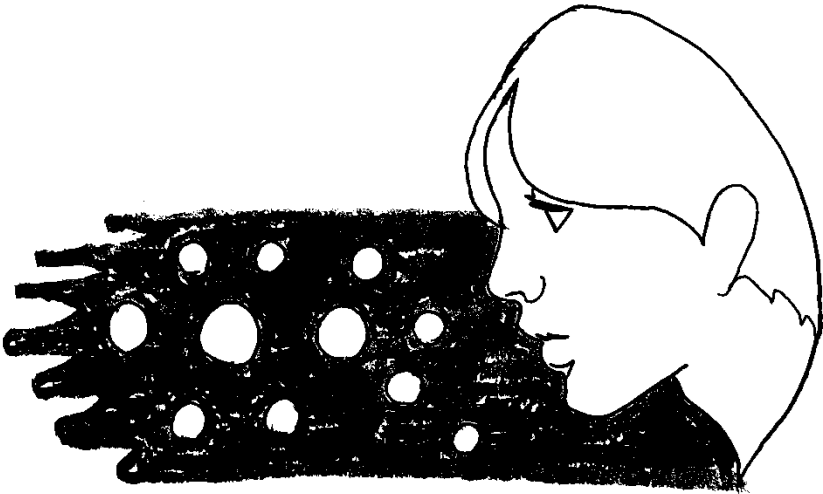


イラスト / 斎藤伊生史

第二維新運動の系譜(三)

(前原一誠、二・二六事件、大森一聲)

岩立 実勇

五 「丙子の手」の同盟関係

ここに前原一誠ら「殉國軍」蹶起後の明治九年十一月一、二日頃に書かれたと思われる西郷南洲の桂久武宛書簡がある。

「日を追ひ冷氣相募り、御場所柄、寒威弥々寒増し候はん、尚御堅固御座成さるべく恐賀奉り候、陳ふれば、両三日珍しく愉快の報を得申し候。

去る二十八日、長州前原・奥平等、石州路より突出候由、三十一日には徳山の人数も繰り出し、柳川辺よりも同様の趣きに御座候。熊本的人数は弥船にて出掛け候由、慥かに相分り申し候。

右旁の引合として肥後の巡查兩名参り、前原等の電報を以て掛け合ひこれあり候に付、相違なき事に御座候。最早、大坂辺は手に入れ候はんかと相察しされ申し候。因・備、其の外土州辺は必ず相起り申すべく。

天長節の期日を相定め居り候趣に御座候処、機会に先んじ候向に相伺はれ申し候。

天長節の期日に候へば、江戸には必ず手を組み居り候者これ有り候はん。左なく候ては、期日の決め方外々にては格別機会日とは相考へられ申さず候。前原の手は余程手広く仕掛け居り候故、此末四方に蜂起致すべしと、相樂しみ居り申し候。云々」

西郷のこの書簡には彼が入手し得た情報と憶測が書かれている。これより先、明治九年一月薩摩人と名乗る政府の密偵指宿貞文と小林寛なる者に騙され、腹心の横山俊彦が一誠の書を携えて鹿児島に行き、西郷と桐野利秋に面会したが、この時に横山から前原が連絡を取り合っている同志の名を聞いたのかもしれない。特に「江戸には必ず手を組み居り候者これ有り候はん」と永岡久茂ら思案橋事件の同志らの存在を指摘している。

「前原の手」は、徳山・熊本・柳川・江戸に「手広く仕掛け」られており、最終的には因・備・土州ほか「四方に蜂起」するであろうと期待している。

では、実際には前原の蹶起の計画はどの様なものであったのであろうか。

先ず「前原の手」は、どこまで仕掛けられていたのか、その同志関係を見ていきたい。

私は、萩の前原党、徳山の今田浪江の党、肥後の神風

連、筑前の益田静方を首謀とする秋月党、東京の旧会津藩士永岡久茂の党、越後の豪農大橋一蔵の党、福岡の箱田六輔・頭山満ら福岡土族の党の七党が一誠と同盟関係にあつた主要な同志と考える。他に越後の大橋の周辺には蒲原の遠藤七郎や高田の八木原繁祉などが、旧会津藩士の永岡の周辺には、千葉警察署の黒河内八三らが関係していた。

中でも重要なのは熊本の神風連との盟約である。前原等の企てが政府の密偵に謀られ漏れてしまったあと、佐々木男也等長年の同志の離反もあり、追い詰められた前原に、「坐シテ縛ニ就カンヨリハ、寧ロ速ニ義兵ヲ挙ゲ、逆ニ取テ順ヲ守ルニ如カス」と腹心の横山俊彦や奥平謙輔が決起を迫つたが説得できなかったと聞いて、益田静方と大橋一蔵も速やかに事を挙げる決断を迫るのだが、「自ラ事ヲ発ス可カラスト」というのが前原の定論であつた。その「前原の定論」を変じさせたのが神風連であつたのである。

明治七年の江藤新平の佐賀の乱にも同調せず、腹心の横山や奥平、同志である秋月の益田や越後の大橋の説得にも心を動かすことがなかった前原が、神風連の富永守国と阿部景器と会見し、「真の同志」「死生のとも」と喜

び、その明治九年七月八日の日記に「義拳を約す」と記し、蹶起への決意を固めたのは何故であろうか。

六、前原一誠の「攘夷」と西洋近代文明批判（義利の弁

前原一誠が神風連と義拳を約すことができた「一脈通うところ」とは、「尊皇攘夷」であつた。その「尊皇攘夷」とは、幕末の尊皇攘夷のような国内の政治運動ではなく、文明同士の思想戦であつた。尊皇攘夷の「攘夷」とはつまり「西洋近代文明批判」であつた。

前原等の「攘夷」は、いわゆる外国人を打ち払えということではなく、神風連の師である林櫻園や同志河上彦斎が唱えた「洋夷制御論」であつて、それはまた「文化と精神の自主独立」（影山正治）であつた。「洋夷制御論」というのは、開国か鎖国かが問題なのではなく、それが外国からの武力恫喝による強制であることが問題であつて、林櫻園の「国を開くも鎖すも我望む儘」という主体性を日本が保持するべきだということである。それは日本人が独立自尊の民族たりうるかどうかということであつた。河上彦斎もまた「閉鎖の権皇国に在りて彼に在らざる様あひ成りたく、左候へば攘夷も待たずて自ら攘夷致さるる道理にて国体も相立ち申すべく存じ候へども」

と閉鎖の権が、自国にあるべきだとしている。

つまり、武力で脅かされて主体性を蹂躪された結果としての開港は、たとえそれが亡国を回避する現実的な方法であっても、精神的な亡国につながると述べた。神風連の上田倉八の歌に「国体のくづれゆく世ぞうらめしき異国人に腰をかぐめて」というものがある。和親の実態は名ばかりのつまり「親夷」ではなく「屈夷」ではないのかと批判するのである。

前原も言う。日本の現状は『万国公法』という「平主国」である。しかし国力に強弱はあっても信義公道には強弱はない。相手国が天下の公道に背くならば、「断然交を絶するも可なり、戦ふも可なり。万戦敗れて三千五百万人悉く戦死する」のが臣子の役割であると。また、日本の国体を保守した上で、「功利器械其他百技百工の末業といへども国に益あるもの悉く取て之を行ふべし」、それが本当の「開化」であるとも述べている。

この考えは、神風連の緒方弘國が、「長を取り短を補ふはよし、在来の長を捨てても彼の物を取らざるべからざる没道理何処にかある」と言い、太田黒伴雄の歌「おのれ知る人にしあれば夷等がしわざ学びもあだならめやも」と全く同じ考えに立つものである。

ところで、前原の「丙子の挙」の同盟に係わった人士を調べてゆくと、大橋訥庵及び大橋陶庵の思誠塾の関係者が多くみられる。特に秋月党にはその門下生が多い。長老磯淳は訥庵の門生、益田静方、白根信太郎、戸波半九郎は陶庵の門生である。また徳山の飯田端は訥庵に、越後の大橋一蔵は陶庵に学んでいる。

大橋訥庵は安政の大獄で吉田松陰、橋本左内らが刑死した後、全国の輿望を一身に担って王政復古運動に邁進した維新回天の志士であり、文久二年、坂下門外の変の実質的指導者として捕縛され、拷問が原因で死去した。安政四年に版行されたその著『關邪小言』の内容は、前原の思想と重なることが多い。

訥庵は「義を尚ぶ国を華と云ひ、利を尚ぶ国を夷と云ふ、義利の弁明らかにして華夷の別始めて嚴なり」とし、『關邪小言』の内容は、日本は元来皇統一系万古革命なく、人々節義を崇め廉恥を重んずる国であるにも拘わらず、その現状は「近世は西洋の学と云モノ盛二天下二行ハレテ、人ノ貴賤トナク地の都鄙ナク拂郎察(フランス)ノ、英吉利ノ、魯西亜ノ、共和政治ノト言ヒ、我モ我モト其学ヲ治メ」る有様となり、それが単に思想のみに止らず、実際の生活にも現れていることを説いて、「凡ソ

西洋ニ出タル事ハ、概シテ貴重スル風ニナリヌルハ、懼ルベク又憂フベ」き実情を呈して居ることを適示した。そしてこのままで行けば「此後ニ至テハ、国体モ西洋ノ如クナラデハ、誠ノ国体ニ非ズト思フベク、朝廷ノ紀綱制度モ、西洋ノ如ク改メザレバ、的当ナラズト思フニ至ラン」と案じた。「華夷の弁」が失われれば、最後は国体の変革改廢にまで至るものであると説いた。そして「蛮夷ノ患害ハ、外来ノ邪毒ニ似タレドモ、其然ル所以ヲ推セバ、全ク己レニ由レル事ニテ」と述べる。つまりそれは所謂相手（外国）の責任ではなく、我が国自身の責任であると。

さらに『海防上書』に云う。その結果人心次第に利に趨き、「日本モ戎狄同様ノ商人国ニ相成リ申スベク」とそれは西洋の様に義よりも利益が優先されることで、義を以て立つ日本が義を失うことは滅亡するに等しく、全く「涙のこぼれ候」と悲しみ憂えたのである。

七、前原一誠の「尊皇」と仁政

次に前原の「尊皇攘夷」の「尊皇」について考えてみたい。明治維新では天皇のご親政を理想としたが、天皇親

政の論理と前原が越後で行おうとした仁政は、実はこれは一体である。

現代の日本では、福祉は西洋の人権主義によるものが主流であるが、古代より天皇親政と弱者救済つまり福祉は一体であった。『日本書紀』にある「天壤無窮の神勅」の意味は、

「稻のよく稔るこのすばらしい日本の国は天照大御神の子孫である天皇が統治する国であり、その統治がつづく限り、この国は永遠に繁栄するであろう」と約束された。天照大御神は太陽の徳をもたれる神である。

太陽はすべてに別け隔てなく恵みを垂れ、すべてを育み生かす力をもっている。天皇はその代理として統治されるのであるから、天皇の統治は、すべてを恵み、全てを生かす統治の象徴にほかならない。それゆえに、天皇の統治が行われる限り、日本の国家と国民の繁栄は永遠なのである。これがこの神勅の意味するところだ。『熊谷保孝』『福祉思想の源流』

ということである。それ苟くも、民に利有らば、何ぞ聖の造に妨はむ」という『神武天皇の即位建都の詔』から「仁徳天皇の竈の煙の逸話」、平成二十九年今上陛下が未だ皇太子殿下でいらつしやった時のお誕生日の会

見て触れられた、人々の困窮を憂いて、諸国の平安と人々の安寧と福祉を祈念した「後奈良天皇宸翰般若心経」等を通じて、明治天皇の『五箇条の御誓文』の「庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス」や『億兆安撫国威宣布の宸翰』の「今般朝政一新の時にあたりて天下億兆一人も其所を得ざるときは、皆朕が罪なれば、今日の事朕が躬身骨を勞し、心志を苦しめ、艱難の先に立ち、古列祖の尽くさせ給ひし蹤を踐み、治績を勤めてこそ、始めて天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし」につながるのである。

大森一聲（曹玄老師）の同志であった二・二六事件の磯部浅一は、日本の国体を「天皇主観の民主主義」と述べているが、よく的を射た言い方である。あくまでも天皇が中心で、その中心の天皇様からご覧になって、民のことが一番大事、民の事が中心というわけなのである。卑近な例で言えば、家庭で両親が子に向かって「お前がこの家で一番偉いのだから、自分の好きなように振舞ってよい」と言うのと、「私たちにとつてお前が一番大切な存在なのだよ」と言うのでは、子供の育ち方が全く違ってくるのである。

こうしてみると天皇親政つまり天皇国の政治とは義の

政治であるべきだということがわかる。

さて、前原が越後で仁政を布こうとしたことは、今では広く知られているが、当時、会計官であった大隈重信はそのことを回顧録で次の様に述べている。

新潟府の知事たりし前原一誠の如きは、全く民部、大蔵の命を矯めて、専横にも越後全国の民人に対して、其の租税の半を減免して、謂はゆる『仁政』を断行せり『大隈侯昔日譚』

ここで大隈は、「専横にも」と前原を批判しているが、大隈自身も認めているように、明治天皇より「救荒の詔勅」というものが下っていたのである。

明治元年六月二十二日、京都御所に出御された明治天皇が、発せられた勅旨の中に、「東方諸州ノ新ニ茶毒ニ罹ル者、其レ何ヲ以テ能ク救助セン」という一文がある。また、それを受けて同日に、新政府から「諸道府県」に発布されたのが「賑救の急務四則」である。

その四番目の項目には、年貢を半減するか、あるいは全額を免除するかについても、「奏可ヲ待タズ府県ニ専任」とあるのである。

とすれば、当時「信濃川近代稀成洪水ニて、川筋堤所々破損」、「信濃川の大水尽く村々を浸し」、「恰も近江

湖水の如し」という洪水・没田の状況で、「専横」に年貢半減令を断行した前原の行為は、明治天皇の「聖意」に適ったものであり、これに反対した大隈の行為こそ「違勅」であつたことがわかる。前原の訴えた、「君の軽き臣の如く、官吏の重き君の如くして、君臣の義を忘れた状態とはこういうことなのであろう。

前原は、その遺書に、日本国内「三千万人をして実には天子の恩沢に感じ」いることが、日本の国体の永続につながると述べている。

そして親族に宛てた遺書に、「天子の御為人民の為と思ひ、かへつて賊名をとりはて候も、後の世にはかならずあかるく相成申へく候」と、蹶起が天皇の為人民の為であつたとし、「天子様へ対し聊はつかしきことろこれなく候まゝ、我等死候とても少も御悔みなきやう偏に祈候」と述べ、堂々と胸を張つて刑についたのである。

前原だけではなく、明治九年の同盟者の多くがその口供書において「万民塗炭の苦しみ」から救うためと述べていることから蹶起の目的がわかる。

八、前原一誠の義拳の意味

前原の「尊皇攘夷」とは、大橋訥庵が「義を尚ぶ国を

華と云ひ、利を尚ぶ国を夷と云ふ、義利の弁明らかにして華夷の別始めて厳なり」と述べている様に、「夷」つまり西洋近代文明的原理である「利」即ち功利主義の浸透の拒絶である。前原が糾弾したのは、「地租改正」が土地を金銭的な価値でしか計れないように貶めたことであり、「秩禄処分」が神風連の樹下一雄が批判したように「先祖が」賜れりし祿さへ止めておのが利と」する状態であり、日本の様が「利を見て義を忘る」る状態となつたことであつた。

前原は、義を以て立つ日本が利益ばかりを優先して義を失うことを防ごうとしたのである。

つまり、前原達の戦いは、日本固有の国体、天皇国の風儀である「義の文化」を守る戦いであり、決して士族の特権を守ろうとしたのではなく、松陰が「士の道は義より大なるはなし」『士規七則』と断言した様に、士族を「義の文化」を守るものとして、その武士の魂「士魂」の護持を唱えたのである。

結論を言えば、前原の義拳は、「近代主義つまり西欧文化というものがどういふものを日本にもたらすか、そのもたらす危機」を逸早く察知し、資本主義から共和制という国体破壊へと続く西洋近代文明つまり「利」の文

化への警鐘を鳴らすためのものであった。そしてその危機を武士の魂「士魂」を以て攘い、「天王国」と言う義の国の国体を守ろうとしたものと言える。

福岡党の奈良原至の『明治血痕集』は、前原が刑にく際に、同じ獄にあった仲間に向けた最期の言葉を、「吾今マ逝ク矣。汝等身ヲ修メ、行ヲ励シ、国恩ニ背キ、聖澤ヲ忘ルル勿レ。義ヲ欺テ利ヲ争フ莫レ」と伝えている。「義ヲ欺テ利ヲ争フ莫レ」、それが前原の一番言いたかったことである。

前原が守ろうとした「天王国」と言う国体の理想とする本来の姿は、国民の安寧と福祉をもたらす義の政治の行われる万国に超絶した国体であった。

しかし、現実には義挙は敗れ、西洋近代文明の功利主義、個人主義の浸透によって、日本固有の義の国体は崩れ、資本主義体制の基礎が確立し、西洋近代文明の方向へ突走って行くこととなっていく。その結果が、前号で述べた父子による会社の経営権を巡る争いであり、兄弟で親の遺産を取り合う姿であり、食肉や食材の偽装をする、義よりも利益が優先される現代日本の姿ではないだろうか。

鈴木大拙の講演「最も東洋的なもの」の冒頭は次の

様な話である。大拙の家は代々医者であったが、明治初期の当時（大拙は明治三年生まれであるから明治九年の萩の変当時は六歳）、診療料や薬代等は請求せず、年に盆と暮れの二度、患者が憶えていれば紙に包んでお礼を持ってくるが、その額というものは定まっておらず、大抵は沢山ではなく志程度であった。また日用の米や魚を買うのにおいても帳面につけて買い、それも盆と暮れに払う。どのくらい買ったかは、米屋や魚屋に言われるがままであり、帳面にきたものをそのまま支払うが、無ければ来年に延ばす。それほど生活が悠長であり、金と言うことに対してあまり関心を持たなかった。（西洋近代文明、資本主義が発達した）今日からみれば妙な世界であるが、金のことにあまり頓着しないような、第二義にしておくような生活が今日また悲しくなった。その様な話である。

「義」を尚ぶ文化のある風景とはどういうものか、よく分かる例だと思う。食材や賞味期限の偽装をする「利」を尚ぶ文化と比べれば尚更である。

（続く）

デザインと私

廣瀬 祐子

今回、機関誌「鉄舟」の表紙のデザインを草案させていただきました。デザインの世界と私の接点を語らせていただきます。

高校卒業後に渡米しました。私は英語力が足りず言葉のコミュニケーションが未熟だったためかデザインのクラスを受講するよう学校側からアドバイスをいただきました。仮に「デザインの授業以外を勉強したい」と言っても、4年間では収まらない可能性が高くて、別の提案があると現在になって理解できます。しかし、当時の私の心中は日本の大学受験に失敗して日本に見放された気分でした。追い詰められ逼迫感を感じました。まるで「デザインを勉強しないのであれば、私たち専門家が言うプロの進学アドバイスに従わないならば日本に帰ってくださいね！」と言われてしまった気分でした。何もかもが怖かったし、どんなアドバイスでも受け入れようと思いました。

ヨウコとユウコ

デザイン専攻の学生の作品集に私のデザイン画は選ばれ掲載されました。作家名はヨウコとプリントされました。「私の名はユウコです。」と訂正を申し出ると「あら、日本人ってヨウコでしょ？ユウコではなくヨウコ・オノのヨウコ、優秀な日本人はヨウコよー間違えられて嬉しくないの？」と笑われてしまいました。言葉が出てきませんでした。無論、名前の訂正は入りませんでした。ウとオの違いはあまり考慮されずに「ヨウコは良い！」「ヨウコって最高。」とユウコの私に言い続ける現地人は少なくなかったです。「初めまして！ユウコです。日本から来ました。」と挨拶をすると「日本から？あーヨウコ！私はヨウコが好きよ。素晴らしい方と思い尊敬してるの！」とこういった感じです。ヨウコに関するお話を聞いて私は、「ヨウコさんってどんなお人だろう!!」と思いました。ただ当時はインターネットが無いワープロ時代です。情報収集が難しい時代でした。そこで私は思い切ってマンハッタンに拠点を移しました。マンハッタンにはビートルズのジョンとユウコの愛の巣 ダクタ・ハウスがあり、ジョンさん亡き後もヨウコさんはダクタ・ハウスに住んでらっしゃいました。ヨウコさんを

知りたいと思いました。3年間のマンハッタン滞在の後に思ったことは「ヨウコ・オノさん」とはニューヨークにとつて真の愛され人で世界平和のためにいつも尽力をあげている方だということ。現在も愛され続けている素敵な女性です。

ヨウコさんのことを褒められると何故だかジェラシーよりも同郷として誇りに思いました。本当にヨウコさんの存在なしに私の渡米生活はあり得ません。ヨウコと呼ばれていると不思議と周りが優しく、好成績が取れるぐらいデザインのアイデアが浮かびました。学期末の成績が発表される毎に私はダコタ・ハウスの前でありがとうございました！とジョンさんとヨウコさんに拝みました。優秀とされた私の学業成績はヨウコさんの存在のおかげが大きく所以しています。

学校を卒業した後、労働ビザ（H1ビザ）を取得、現地のデザイン事務所でアシスタントとして働きました。その後、ヨーロッパ系由で世界を一周して日本に帰国いたしました。就職先に私は外資系を選ばず、古き良き昭和の香りする日本企業の制作会社に就職しました。

その当時は両親も元気でした。私は4人兄妹の末子でして、日本帰国時は他の兄妹は独立していたため、同居するは両親、ほとんど一人っ子のように養われました。6人家族が3人家族になりました。両親が他界したのは一人っ子スタイル生活の幸せが続き、私自身、結婚妊娠出産を終えた後のことです。両親を亡くした際の空漠の想いを引きづり、叩いたのは禅の世界の扉でした。

禅と私

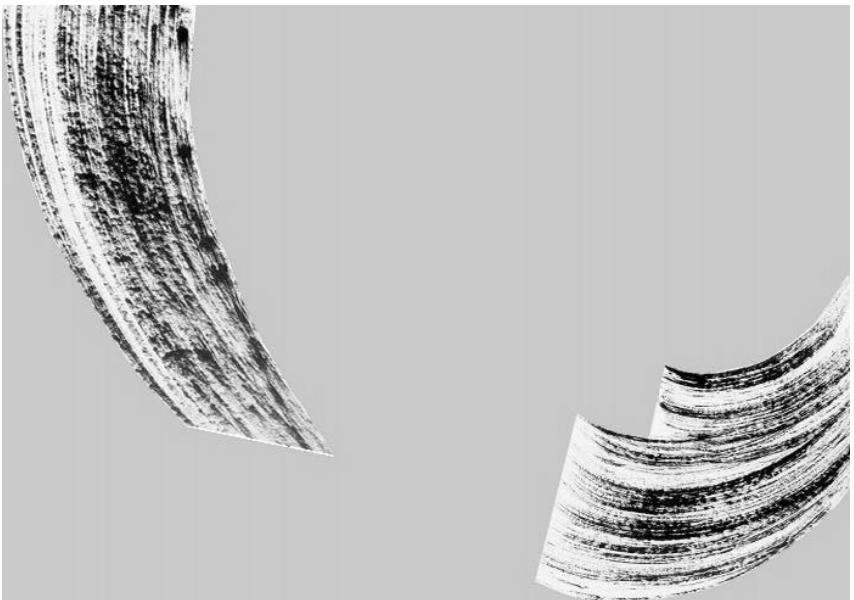
初めての坐禅は北鎌倉の円覚寺で行いました。その後、神奈川県に特にゆかりのない私が北鎌倉に行つてどうにかなることは無いと感じて、ひと月後に東京都中野区の高歩院の扉を叩きました。最初は月一回、日曜禅話会に足を運び、徐々に回数が増えていき、金曜日の夜坐に定期的に通うようになりました。そして老師との会話の中でデザインについて語らせていただいたのが縁となり、今回の表紙のデザインを担当させていただくこととなります。

先ず、以前の表紙が、書の写真入であつたせいもあり、筆の運びが気になりました。鉄舟会なので、鉄舟から一

字、「舟」を取り、筆の運びに見て映る箇所は、「禅道」「書道」「茶道」「剣道」を集結した「波」と「風」を表現して、鉄の風化をロゴの文字で表しました。

表紙のデザインと言われた瞬間にパッと頭に浮かんだ最初のアイディア3つの案からひとつ採用されました。

自分のデザインした表紙の冊子を取り、デザインの草案は私ですが、草案だけでは作品とはなりません。周りの方とのチームワークに参加することの楽しみ、そして一つの作品がうまれました。毎日、朝、私は坐禅を組みますが、坐禅一つでも高歩院で皆と一緒にした方が断然心強い気がします。今後もデザイン有無関わらずチームワーク、無心、衆生を感じながら、鉄舟会のメンバーとして楽しく活動していけたらと願っております。



境目の考古学

遠藤真美

初めまして。一年半ほど前から土曜座禅会と書の会によくお邪魔している遠藤と申します。

このたび、鉄舟誌への執筆の機会をいただいたので、以前学んでいた考古学の視点を通して、高歩院の建てられている東中野という場所について書いてみます。

東中野と崖

東中野は崖と坂道の多い街だ。

土地一帯は西から東に向けて傾き、神田川から西新宿方面に向けて一挙に平坦な形をしている。その理由は、東中野が、関東西部を占める武蔵野台地から枝分かれした「中野台地」と「野方台地」の東端に位置しているからだ。

高歩院は中野台地の端、東中野で最も急な崖の中腹に建てられている。駅から道場へ向かう道が急坂なのも、急勾配の階段を昇り降りする必要があるのも、高歩院が

台地と神田川の境目にあり、台地のきわに沿って急な坂や崖が並んでいることに由来する。

高歩院と神田川の縁は深く、高歩院の庭にある碑には、以前この場所が「成趣園」と呼ばれる庭園だったところ、神田川から池の水を引いていたと書かれている。また、町内会の名前にもなっている「小淀」という地名は、昔、生活用水の確保のための堀（淀）があつたことの名残りだという。

「凹きところに水溜る」ということわざがある。条件の備わった場所には、招かなくても人や幸福が集まるという意味だが、この言葉は考古学的にも当てはまる。事実として、水のある場にはあらゆるモノが集まるのだ。そしてもちろん、この地にも。

「凹きところ」に集まる生き物たち

中野区歴史民俗資料館によると、中野台地がいまの形になったのは、約一万二千年前。縄文時代の草創期にあたる。開発などによって多少変化したもの、高歩院が建っている崖は、現在とほぼ同じ形のまま過去にも存在した。

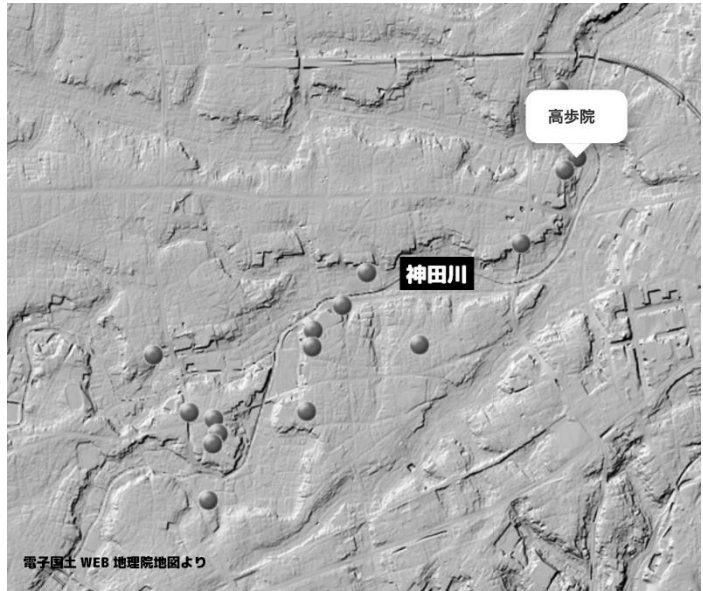


図1…東中野の起伏図。丸が表すのは旧石器〜縄文時代の住居跡や遺物が見つかった場所。神田川沿いにヒトの暮らしの痕跡が広がっていることがわかる(出典:国土地理院ウェブサイト 陰影起伏図を加工して作成)

井の頭池を水源とする神田川も、その名で呼ばれる前から現在の場所を流れ、人々は川沿いや崖上に住居を作っていた(図1)。

当時、人々が居を構える場所として選ぶのは「水のあるところ」。豊富な水があれば肥沃な土が集まり、土があれば植物が、植物があれば虫が、虫があれば多様な動物たちが集まる。そんな環境を狙ってヒトも集まった。

旧石器時代〜縄文時代草創期にかけての日本列島は火山活動が活発で、繰り返される噴火によって関東全域に火山灰が降り注いでいた。植生も乏しく、生き物にとって過酷な環境だったといわれている。そんな中、生存に適した場所のひとつが、中野台地と神田川の境目だった。

拡散する豊かさ

その後、縄文時代前期から中期にかけ(約六千年前)全世界的な温暖化が起こる。気候の変化によって、関東地域ではドングリ類やトチノキ、クリ、クルミといった広葉樹が増え、それを食べる生き物たちの種類や数も増加した。大型の住居ができ始め、土器をはじめとした縄文文化が発達したのもこのころだ。

東中野地域でも、住居跡や多様な土器が数多く出土している。

また「縄文海進」と呼ばれる、海が内陸まで入り込む変化によって漁労も活発になった。関東の貝塚からはマグロやブリといった大型の魚の骨も出土しており、当時の人々のグルメな食生活を窺い知ることができる。

また、縄文海進によって現在より遠浅の海が続いていた縄文時代では、丸木を使った舟での移動が盛んだった舟はあらゆるモノを運び、人同士の交流を活発にさせる。行き交う人々がふれあい、言葉が交わされれば、そこから土器や石器、住居の作り方など生活の知恵、旅や航海の技術といった知識が交換され、ボーダーレスに伝播していく。

このころ、東中野周辺の海岸線は高田馬場周辺まで広がっており（図2）、当時の東中野地域は、豊富な陸地の植生に加え、2〜3キロ移動すれば海にもアクセスできるといって、人が暮らす場所としてかなりの好立地だった。ここは、海と陸を行き交う人々のハブのような場所だったのかもしれない。

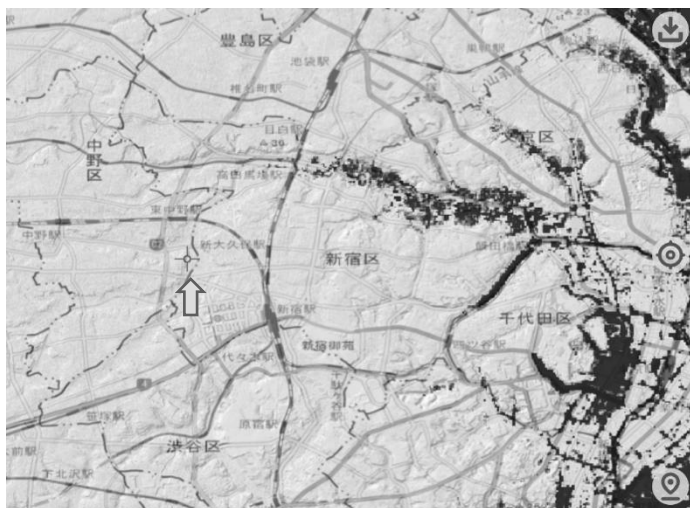


図2： 縄文海進時の海岸線の様子。マークされた場所が高歩院の位置、色の濃い部分は当時の海岸線を表す（出典：JAXA海面上昇シミュレーター）

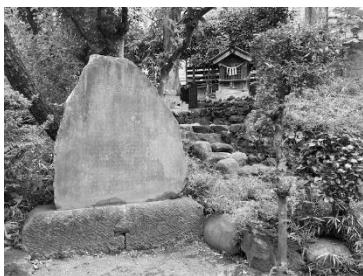
「境目」の役割

土地の境目には、異なる地からやってきた人々を受け止め、また送り出す場所としての機能がある。

約一万二千年前、水を求めやってきた生き物たちの集う場となつてから、高歩院周辺の地は人々が暮らし、食べ、知識や知恵を交換し持ち帰る場として発達した。

その後時代は流れ、江戸時代は幕府の直轄領として、明治以降は為政者たちの住居や文人たちのサロンなどが並ぶ、開かれた場所として栄えたという。関東大震災後には火災で家を失った人たちが住む場所を求めて押し寄せ、第二次世界大戦における空襲では、成趣園を含め、焼け野原となった。それでも人々はここに暮らし続けた。ヒトの寿命は短く、時代は移り変わる。しかし、そこに重ねられてきた事実は残り、境目という場所が背負う役割は続く。

そんな場所に、私たちは立っている。



※ かつて崖だったことを偲はせる高歩院周辺と、
成趣園の碑

親子で坐禅体験 高歩院 心落ち着くひと時に

※「週刊とうきょう」八月二十五日号より、許可を得て転載

中央一丁目の山岡鉄舟の邸宅跡地にある臨済宗天龍寺派鎮国山高歩院（垣堺玄了住職）の鉄舟禅会では、夏休みのひとときを活用して親子でちよつぱり禅の世界を覗いてみる機会を提供しようと、八月二日「親子坐禅会」を行った。

鉄舟禅会では、禅の修行として、坐禅のみならず「禅の書」「禅の剣」「禅の茶」を自分自身を見つめることを目的として実践しているが、親子坐禅会では、坐禅、書茶の体験を行った。

受付後、まず参加の記念にと参加者が描いた絵で缶バッジを作成し、開会となった。

和室へと移動し、住職から「禅宗ではよくお茶を飲みますが、到着された時には到着茶礼があります」とお抹茶とお菓子が供され、お茶をいただいた後、坐禅の座り方を教わり、一から十までを心の中でゆっくり数えることを繰り返すと説明があり、おりんの澄んだ音を合図に、

まず五分間の坐禅を行った。

住職から「坐禅は心を落ち着かせますが、心を落ち着かせるためというよりは、心を落ち着かせようとしても心は落ち着かないということを体験することでもあり、過去、未来を切り離して今に集中をしなさいということです。わいてくる心が善い時も悪い時もある。善いことも悪いこともさらつと捨てる。皆さんは、やり直しはいくらでもきくし、可能性はいくらでもある」と話があり、続いて十分の坐禅に取り組んだ。

坐禅後、道場に移動しての書道では、住職の指導で「主人公」を半切の書道紙に、まずは手本を見て、次にゆっくりと同じスピードで、最後は途中で墨を足さず、筆を垂直に立て、肘を水平にして書き、書かれた書を見ながら住職から「だんだん文字がどつしりとしているように見える」などと話が、参加者からは「なぜそう思われるのか」などの質問もあり、住職は坐禅の話も交えながら解説し、最後にお茶をいただいて親子で坐禅体験を終えた。

参加した親子は抹茶をいただき気持ちを切り替え、坐禅で集中したのちに、禅の書道を体験し、住職の禅の話を書くという機会に恵まれ、心落ち着く静かな時間を過

ごしていた。

鉄舟禅会では、十一月八日に晝追展を開催する予定で、
猛稽古に励んでいるという。



小淀西町会 こども神輿巡行

斎藤 健

高歩院・鉄舟禅会が所属している小淀西町会では毎年九月に氷川神社の祭礼行事として子供神輿・山車の巡行が行われています。今年は七十一年振りに神輿が新調され、また巡行路が変更となつてちょうど高歩院前で折り返すことになりましたので、高歩院の玄関、駐車場前を休憩場所としてご利用いただきました。九月十三日の当日、朝までの雨も止んで折り返しの巡行開始までのひととき、皆様には冷たい飲み物やフルーツなどをお出ししました。準備にあたっては町会の皆様に全面的にご協力をいただきました。大変ありがとうございました。



【お知らせ】

訃報

鉄舟禅会元理事の有賀樟生様が、八月二十四日逝去されました。七十八歳でした。

有賀様は大森曹玄老大師、吉田玄機老居士について入室参禅された後、高田玄中老大師を師家として招聘し、長年に渡って鉄舟禅会の運営や後人の指導にご尽力いただきました。

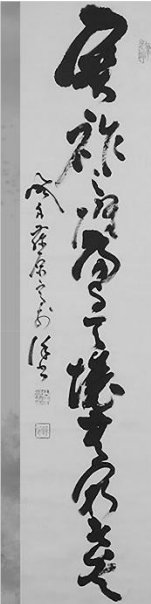
戒名は傳心院真源原木居士。葬儀の導師は、鉄舟禅会現師家の垣塚玄了老師がお務めになりました。

ご逝去を悼み、
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

令和七年度 鐵舟禅会書道展

十一月八日（土）正午から夕方五時までと、九日（日）午前十時から夕方五時まで、鉄舟禅会道場にて令和七年度の書道展を開催いたします。開基・山岡鉄舟居士や大森曹玄老大師・高田玄中老大師など歴代師家の書に加え、現会員の一年間の稽古の成果を展示いたします。

ご高覧を賜いましたら幸いです。



鐵舟禅会
書道展

会場
鐵舟禅会道場
東京都中野区中央一丁目十七番三
電話 03 (5338) 9220

11月8日（土）正午～午後5時
11月9日（日）午前10時～午後5時



「寄稿のお願い」

本誌編集部は、読者の皆様からのご寄稿を広く募集しております。文字数などに制限はございませんが、誌面の体裁を整える上で多少の手直し、校正の可能性がりますることをご了承ください。寄稿を希望される方は左記の鐵舟禅会メールアドレスに是非ご連絡ください。

teshukai@gmail.com

『禪の真髓』復刻のお知らせ

大森曹玄老大師の三十三回忌記念事業と致しまして『禪の真髓』を復刻いたしました。

鳥影社より定価二七五〇円（税込）で発売されております。ご希望の方はどうぞお問い合わせ下さい。



【編集後記】

逝去された有賀さんと面識はありませんでしたが、旧ホームページに載せられていた「法定」の動画を何度も拝見していました。西村さんとの演武の気迫には圧倒されるばかりでした。道場には、大森老師が修行に組み入れた「法定」を継承されてきた諸先輩方の名前入りの木剣が残されています。これからも奥田顧問のご指導の下、心して稽古に励みたいと思います。合掌。（田波）



鐵舟禪會 行事予定

令和七年十二月

一日(土) 土曜坐禅会
八日(土) 土曜坐禅会

書道展

九日（日） 晝道展
十五日（土） 土曜坐禅会

二十二日 (土) 土曜坐禪会
二十九日 (土) 土曜坐禪会

三十日(日) 日曜禪話会

同
十一月

六日（土）土曜坐禅会

十三日(土) 土曜坐禅会

二十日(土) 土曜坐禅会

二十七日(土) 土曜坐禪会
二十八日(日) 日曜禪話会

令和八年
一月

十日(土) 土曜坐禅会

十七日(土) 土曜坐禅会

二十四日(土) 土曜坐禅会

二十五日（日） 日曜禪話会
三十一日（土） 土曜坐禅会

八時 八時 八時 八時 八時
十一時 九時 十一時 十一時 十一時

八時 八時 八時 八時 八時
九時 十一時 十一時 十一時 十一時

八時 八時 八時 十時 二時 八時 八時
九時 十一時 十一時 十一時 十七時 十七時 十一時 十一時

諸事情により予定が変更になる場合がございます。
随時、ホームページでお確かめください。

<https://koin.org/>



令和七年十月十七日 発行
発行 鉄舟禅会
編集 鉄舟禅会出版部

東京都中野区中央一―一七―三
電話〇三(五三三八) 九三二〇

印刷 恒信印刷株式会社

東京都板橋区板橋一―二八―八
電話〇三(三九六四) 四五二一

*乱丁・落丁本がございました場合
はお取り替えいたします

「鉄舟会理事会」郵便口座
00190・3・579820